

原告団

遺族・CO裁判、災害責任
追及、特集号
第八十二号

原告団レポート CO患者—— 永野 利男 さん

心の痛み

CO患者の性機能障害のことが取り沙汰される。事実患者の大半の者が、大なり小なりこの障害の痛手に苦しんでいる。

性機能障害——言葉は簡単だが、それは患者本人ばかりでなく性という一本のひもで夫婦として結ばれている二人の相手の妻をささ、まきこまずにはおかない性質の障害だけに、苦しみもまた複雑さを加える。それが人間にとつてどれほど残酷な仕打ちであるかを意味しているか、言葉の奥に深くかくされている恐るべき現実の片りんにも触れるならばだれしも慄然とせずにはすまないだろう。

とりわけひどい痛手を受け、そのために長く責めさいなまれながら生きてきた典型的なCO患者に、永野利男さんがある。

人柄と根性

三川鉱大発火のとき、永野さんは三十九歳で、マサ子さんが四十二歳だった。

それまで、よき夫でありよき父親だった長男さん。盆栽や釣、絵を描くことなどが趣味だった。

「仏さんでござりました。私が賃金かみりにも低いことなどでグチをこぼしても、ただおとなしいばかり。それがあなた、ガス患になったと同時に鬼になつてしまつて……」

マサ子さんが述懐するように、子どもの東京さんをスケッチにつれていってやったり、学校から出された宿題の虫採取などは、自分もついでに採取を手伝いもした。

性的無能者

その人間——永野さんが、あの日以来一変したのである。物忘れはよいとして、強情、爆発する狂性。それに性機能障害。とりわけ酷くおられないのが、問題の性機能障害についてである。

それまでは、あれほど暖かく睦み合ってきた仲だったのに、いつまでも何のおとずれもなかった。

三井に人の恨み必ず

性的無能者にされ、傷痕残したまま突然の死

断たれた、心ののぞみ

人のく親しい友だちでさえその頃、「ガス患というてくささい、朝晩しゃんと歩きよらずとじやけんが、男にかわりはあめめもん。でけんでけんち、あんまりせいたくいうと、あなたがやせ細つてしまふたい。いやばい、この人、へへへ……」と、ことを信じてはくれなかった。

欲情狂乱

それでもあったのだが……。ところが何となく、マサ子さんのよるこの頃の帰宅は、同時に生き地獄の責め苦へのスタートでもあったのだとは。

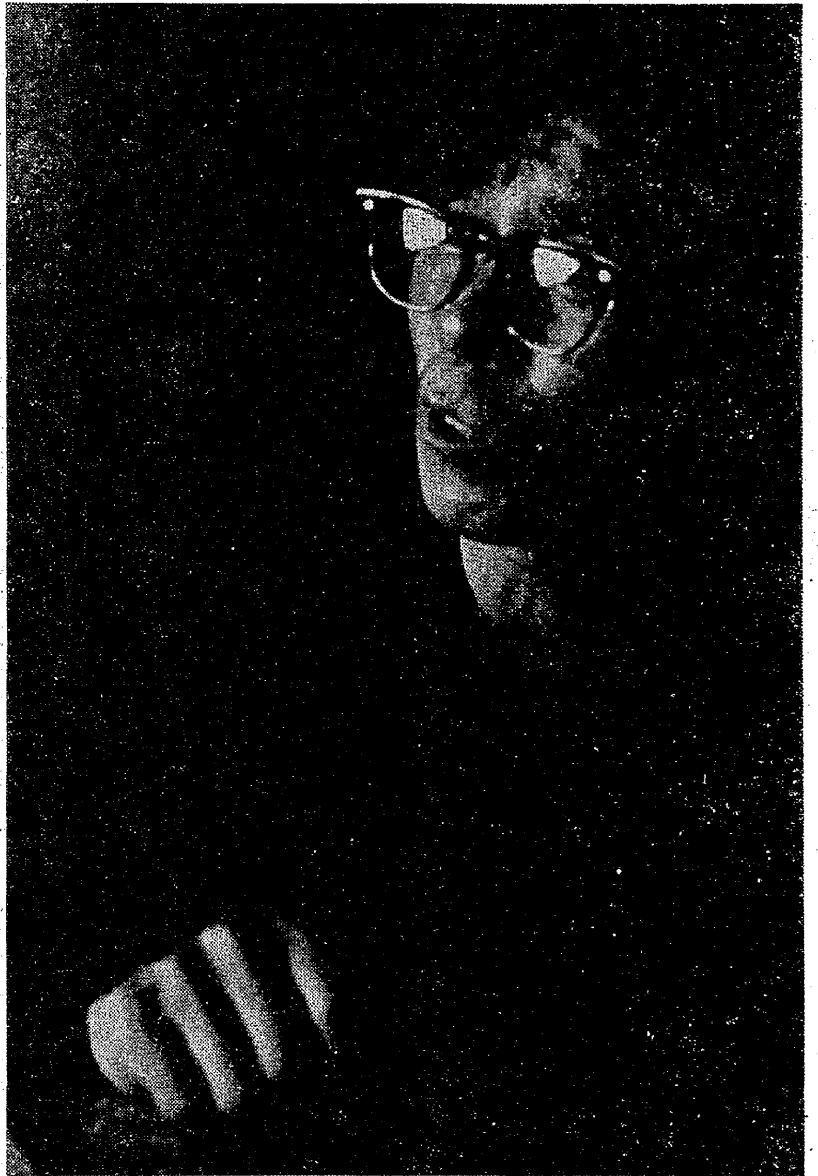
「ね、どうちゃん、体のどげんかなつとるとじゃなかるうか。どオ。私が診察してやるたい。こつちにて道具は貸してござん。もんでやるけんが」

私も一生懸命なら、主人も一生懸命でした。とマサ子さんはその夜のことを語るが、もはや永野さんのものは完全に使いものにならなくなっていた。まきれもなく、三池闘争の頃のこと、分裂した三池新労組への加入を勧誘しにやつてきた係員に対して、彼がまた玄關の敷居をまたぎもしないうち、いきなり「何はしにきたつか

たおれた妻

その後も依然として打ち続く物忘れ。加わる強情。ますます爆発をすまじくしてゆく狂性。ついにマサ子さんの体は現実の重さを背負い切れず、胸の病にたおれてしまった。

二度の入院生活。特に二度めはた(この年の二月のこと)年のこ



故永野利男さんのおもかげ

加えられてくる暴力。投げ飛ばし踏みつけ、蹴り、そして永野さんはわめいた——「何のためお前はこの家におつとか。女房の役目もできんごたる女が何になるか。出ていけ」。

体を台なしにした者への憎しみが、妻への憎しみに変って爆発する。あけくには「殺してやるのだ」と、何回首をしめられたか知れないという。

飛びこんでくる京美さんの手にかろうじて助けられ、よるの夜なかわが家からほうほうのういで逃げ出しては、杜宅の露路に親十二人が夜通し立ちながら泣いたことも数え切れない。

「これは夜なばかり。何のゆえのことかすわります。恥かしくて、そうそう人さまの家に逃げこんで助けてもらつてもきません。たが親十二人、杜宅の露路に立って泣くばかりでござりました」。

そうなると思はれ、そう燃えさかり、行為はそのうえ狂性を加えてくる。マサ子さんがはつとすると間もなく、何度も何度も返されてゆく空しい行為。

それでも、何とぞ思いを遂げさせてやらなければ……。これが悲しい妻のさためと心にきめ、マサ子さんは耐えに耐えた。

とはいえないま身の体のこと。限度のないはずがない。夫の余りの狂乱に、やがて耐え切れなくなるマサ子さんは、自分の体を抱きすくめている夫の腕を無我夢中でふりほどき、乱れた寝床から飛び出さずにはいられなかった。

不意の死

そんなことがあった後は、マサ子さんはきまつて泌尿科専門医院にかけこんでいかねばならぬ。同時に、マサ子さんに向かつて



仏前に手を合わせる妻マサ子さんに、故人が笑いかけている。

治療を受けるためである。初めてのときのこと、局部を診たさすの医師が驚いていった。「奥さん、なかは爪か何かのかき傷ばかりですよ。これはひどい化膿してるじゃなかですか」

×

ついでこの間の九月二十六日、またつた予想だにしない出来ごとが起きた。その永野利男さんが急死したのである。死因は「CO中毒による脳内出血」(死亡診断書)ひとこと言葉を残すこともなく余りにも突然な夫の死に、マサ子さんはぼう然自失、言葉もなかった。

行年五十二歳。CO患者仲間といふしよに、造成職場の万田作業所でソバミす編みの仕事をしていたところだった。

「ガスを吸われた後鬼に変わってしまった主人でござりましたけど、生きていてもいこうとござりました。もともと人柄が人柄でしたし、とすれば気持の方も落ちついて、恐ろしい障害のために苦しみ通した主人も仏さんのようになるにきまつてはいる。その日こそ、私たちに昔のしあわせがもつてくるときだと、たがそればかりにのめをかけた、生きていきましたに……」

こんな主人への労災補償を打ち切った政府の仕打ち。たくさんの労働者の命を合理化で奪い、また苦しめ続けてきた三井に罰のあたらんことはござりません。きつと、人の恨みの恐ろしさを感じるときがござりますしよ」

怒りの遺族の住まいは荒尾市原万田社宅九十六棟。短かくはあったが悲惨だったCO患者——永野利男さんの生涯は、私たちに果たして何を語りかけているだろう。

ともあれ、永野さんとまったく同じような性機能障害のため苦しみつづけながら生きていたCO患者が、ほかにも少なくないことを付記してペンをとおく。